（体育科教育２００４年９月号）

子どもたちの可能性は、４２．１９５ｋｍ

西宮市教育委員会　　仲　島　正　教

「アテネオリンピックマラソン出場　坂本直子選手」西宮市役所の前にこんな大きな看板が立っています。西宮市内の今津小、真砂中、県立西宮高校出身の坂本直子さんを応援するものです。オリンピック選手というとすごいなと思いますが、坂本さんは高校時代全国大会にも出たことのない無名の選手だったそうです。また現在、私の同僚の加藤周司先生は、真砂中学校時代陸上部で坂本さんを指導した先生ですが、中学時代の坂本さんは、ごくごく普通の陸上部員であり、記録的にも飛びぬけた存在ではなかったようです。ただ坂本さんの眼はいつもキラキラと輝いていたそうです。

マラソン 42.195km は、よく人生そのものだと例えられることがあります。私は現在 48 歳ですから、マラソンに例えれば、もう折り返し点を通りすぎて 25ｋｍ地点に近づいていることになりますし、坂本さんはまだ 10ｋｍをすぎたぐらいです。最近の小学生の記事には大変心が痛みますが、６年生では、まだたった５ｋｍをすぎただけの所なのです。

優介（仮名）との出会いは、６年生になってからでした。大柄な男の子でみんなの中ではボス的な存在でした。ただ、優介の眼はどことなくいつも暗い感じがしていました。４月のある日、優介を別室に呼び、指導をしていると「俺はどうせ役に立たない人間や。もし役に立たない人間の星があったら、俺はそこにきっと送り込まれるわ」そんな発言をしたのです。「この優介を何とかしたい。優介に『俺もなかなかなもんや』と言わせたい」私はそんな思いに強くかられたのでした。それ以来、優介のいいところを必死で探そうとするのですが、見えるのは悪いことばかり。車椅子の友達をわざとひっくり返したとか、公民館で迷惑行為をしたとか、そんなことが続きました。でもそのうち、漢字をていねいに書いたとか、宿題をしたとか、机から落ちた友達のノートを拾ってくれたとか、少しずつ優介のいい所が見えてきました。私はそのたびに家庭訪問に行き、「お母さん、今日優介がこんなことをしてくれました。」と玄関先の５分間報告をするのです。最初の頃は、お母さんもけげんそうな顔をしておられましたが、そのうち私の訪問を楽しみにしてくれるようになり、話をする場所も玄関先からだんだんと家の中に通されるようになっていきました。優介もそのあと私を車まで送ってくれるようになりました。

ところが、このままうまくいけばいいなと思っていた２学期の半ば、事件は起きました。私は優介を別室に呼び、厳しく指導しました。しかし彼の眼は斜めを向いていました。「優介！おまえはしんどいことからはいつも逃げているやないか。毎朝のたった２周のジョギ

ングもさぼってばかりやないか。悔しかったら毎朝 10 周走ってみろ！」すると優介は「先生も走るんか」「先生も走ったる！」と意地の張り合いになりました。・・・ということで、翌日から卒業式の前日（３月 17 日）までの約 150 日間、約 1500 周の私と優介とその仲間たち４人のジョギングが始まったのです。優介は遅れてくることもたびたびありました。トラブルもよくありました。しかし時間がすぎてもいつも 10 周は走り通しました。雨の日は「今日はうれしいな！」と元気に話しかけてくる優介に「何言うんや！」と言い返しながら私も心の中でホッとしているのでした。そんな山あり、谷ありの日々が続いていきました。

１月下旬の日曜日、私たち６人は高槻シティマラソンに出場しました。あいにくの雨の中でしたが、３ｋｍのファミリーコース（小学生）をずぶぬれになりながら走りました。ゴールしたあと、冷えた体で、100 円のうどんを一緒に食べました。「先生、このうどんむちゃくちゃうまい！先生ありがとう！」・・・この子たちを思いきり抱きしめてやりたくなりました。

卒業まであと１か月になってきたある日、優介が「卒業記念に、世界新を目指してみんなで 42.195km 走ろう」という企画を出してきました。トラック１周は 150mだから、281 周と 45mで 42.195km になる、６年生と先生で 74 人だから半周ごとにたすきをつなげば一人だいたい８回走ればいい、混乱しないためには走る順番の一覧表をつくろう、運動場を２時間半ほど独占するから他の学年に了承をとらないといけない。そんな手続きを子どもたちはこなしていきました。そして卒業前の３月９日、この企画が実行されました。子どもたちは「もう何回走ったかわからない」「思ったよりずいぶんしんどい」などと言いながらも全速力でトラックを駆け抜けていきました。体調の悪い子や疲れて走れなくなった子の分は、元気な子が途中で替わって走ってくれました。途中で足がつりそうになった私の分も走ってくれました。みんなの心が一つになった「黄色いたすき」は、25km 地点までは世界新を上回るペースで進んでいきましたが、30km ぐらいから遅れ始め、ゴールは２時間８分 18 秒で惜しくも記録達成はなりませんでした。最後は、アンカーを務めた優介の後ろをみんなもついていきながらのゴールでした。世界新は逃したけど「最高の思い出になった」と子どもたちは満面の笑みをみせてくれました。

３月１８日卒業式の朝、私は目を疑いました。朝早く学校に来るとなんとあの５人が一生懸命に運動場を走っているではありませんか。10 周ジョギングは卒業式前日で終わったはずなのに、子どもたちは卒業式の朝まで走っていたのです。「今日がほんまの最後や。今までで一番速く走れたで」と優介が笑顔で話しかけてきました。私は声につまってしまいました。「おまえら・・・。なあ最後に先生ともう一周走ってくれへんか」「うんええで」それから私はネクタイ姿のまま、この５人と幸せなラストランをしたのです。子どもたちの後ろ姿を見ながら、涙があふれてしまいました。

卒業式は最初から涙腺がゆるみっぱなしでした。子どもたちは本当に「いい顔」をしていました。とっても心に残る卒業式でした。優介がぽつりと言いました。「俺、先生と会えてよかったわ。俺、将来教師にはならないと思うけど、もしなったら先生みたいになりたい」またまた涙が出てしまいました。「先生も優介と会えてよかったぞ」そう言うのが精一杯でした。

あれから３年後、彼らは中学３年生になりました。兵庫県中学校駅伝出場を目指して、阪神大会が開かれていました。県大会出場条件は８位以内、優介の学校はアンカーにたすきが渡った時点で８位でした。アンカーの淳一（仮名）はみんなの大きな応援を背に、元気よく走り出しました。しかし、ゴールに先に帰ってきたのは淳一ではありませんでした。淳一は９位でした。涙を流しながらのゴールでした。泣きながら倒れこんだ淳一をみんなはどうすることもできずにただ見ているだけでした。そこに、向こうからベンチコートを抱えた優介がやってきました。淳一の背中にそっとかけてやり、肩を撫ぜてやる優介でした。感動せずにいられませんでした。

そのあと、優介と二人で話す時間がありました。「先生、俺な、将来先生になろうかなと思ってるねん」「そうか・・・、それはいい。おまえみたいな奴が先生になったら、きっと子どもの気持ちがわかる先生になるぞ。がんばってなれよ！」

現在、優介は 17 歳。甲子園を目指して毎日厳しい練習に明け暮れている高校球児です。これからも苦しいことや失敗にもいっぱい出会うことでしょう。挫折することもあるかもしれません。でも 42.195km から考えるとまだ 10km の手前なのです。優介の可能性はこれからもまだまだいっぱいあるのです。

そんな優介を私は、これからもずっとずっと応援し続けたいと思っています。

大修館書店「体育科教育２００４年９月号Ｐ．２８掲載